様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２２１３

研究課題名（和文）『百人一首』の総合的研究

研究課題名（英文）a comprehensive study of 'hyakunin-isshu'

研究代表者
渡部　泰明（Watanabe, Yasuaki）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：６０１９１８１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、『百人一首』の文献学的研究を行い、『百人一首』の古注の相互関連について調査・考察したうえで、その成果を踏まえて、『百人一首』の注釈学的研究を行うという手順をとった。注釈学的研究においては、それぞれの歌人の家集における位置づけやそれとの関連を重視することによって、作者の表現意図を正しく析出するという方法を採用した。その過程において。それぞれの作品に共通して「縁語的思考」と呼ぶべき表現意識が見られることを発見した。この「縁語的思考」を基軸にして、和歌史の中で個々の和歌および『百人一首』という作品を意味づけた。その成果は、『中世和歌史の研究 様式と方法』の単著として結実した。

研究成果の概要（英文）：This research did a philology-like study of "Hyakunin-isshu", and was based on the outcome at the top which was investigated and considered about interrelation of an old note of "Hyakunin-isshu", and I got the procedure which does a notation scholarly study of " Hyakunin-isshu". Since putting it in the notation scholarly study, the way to separate out author's expression aim right by emphasizing the respective placing in the house collection of the poet and relation with that was adopted. In its process. It was common to the respective works, and it was found that the expression consciousness which should be called "related word-like thought" is seen. This "related word-like thought" was made a criterion and each poetry and a work called " Hyakunin-isshu" were defined in the poetry history. The outcome was realized as a single work of " study of medieval poetry history The style and way".

研究分野：人文学

キーワード：和歌史　百人一首　藤原定家　西行　縁語的思考

１．研究開始当初の背景

戦後、和歌の研究は急速に発展した。歌人の余技、といった趣のあった研究状況が、膨大に残る歌書、無数の歌人たちとその事蹟を具体的に分析する客観的な研究がスタートし、それが定着していった。『万葉集』から明治時代に至るまで続いた古典和歌の世界は、詳細にわたって明らかにされてきた。かなりの群小歌人、零細な歌書に至るまで、分析の手が伸びた。しかしそれはまた、文学、すなわち言葉の芸術であるはずの和歌の、表現の様態の分析を総体的に薄くする結果を招いた。客観性の名目のもとに外面的な調査ばかりが優先され、肝心の作品の中身への関心が藤原定家してしまった。それは教育・啓蒙とのつながりをも希薄化し、結果的に和歌研究の土壌を荒廃させる結果となった。

新たな表現の学としての和歌研究の領域を開拓し、推進することが不可欠なのである。かといってもちろん、和歌の歴史は長い。和歌の本質を追究しようとすれば、この長い歴がなぜ続いたのか、和歌の命脈はなぜ自足したのか、ということがまず第一に問われなければ成らないだろう。かといって、昔の素朴かつ牧歌的な研究に戻るわけにはいかない。具体的な作品に基づきながら、しかし狭い時代に閉じこもることの無い、視野を確保しなければならない。そのような和歌史へと展望を開くの作品として、『百人一首』が浮び上がってくるのである。

鎌倉時代前期に成立した『百人一首』は、その研究史も古い。すでに室町時代から注釈的研究が始まっている。また近年はとくに成立の研究に関心が集中しており、和歌表現を詳細に分析する研究は、それに比して遅れていると言える。もちろん注釈的研究がないというわけではない。ただ、『百人一首』を作品として独立させて読むことが主流である。それによって、解釈を行う立場を明確にし、その客観性を担保し、秀歌撰としての作品の意義に迫ろうとする意図は明確である。そのために、『万葉集』から鎌倉時代初期の和歌史を受け継いでいること、さらにその後の和歌史に圧倒的な影響を及ぼしたことの両者が、無視されがちになっていた。研究史の上からも、本作品の如上の視点からの作品研究は喫緊の課題なのであった。

２．研究の目的

研究の柱は次の三点から成る。第一には、『百人一首』の文献学的研究である。全国に散在する『百人一首』の伝本を博捜調査し、主要な伝本を整理する。その上でもっとも信頼性の高い本文を確定する。第二点は、『百人一首』古注の相互関連の研究である。の二つを行い、その成果に基づいて、『百人一首』の注釈的研究を遂行するということにある。究極の目的は、その盛花を基盤として、和歌史を考えたいということにある。『百人一首』を和歌史の中で位置づける、ということでもあるが、それにとどまらない。なぜなら『百人一首』は和歌史を作った、あるいは和歌史の原動力になったとさえいえる作品であるから、『百人一首』を分析することは、和歌史そのものを捉え返す視角を得ることになるはずだからである。

３．研究の方法

１）全国に散在する多数の『百人一首』の伝本を可能な限り調査し、比較検討して、安心して依拠できる本文を作成する。

２）これも全国に多数存在する『百人一首』の古注を調査・分析し、その相互の関連について跡づけて、中世人が『百人一首』をどのように受容していったかを考察する。

３）１）および２）の成果に基づいて、『百人一首』の注釈的研究を行う。その際、当該和歌が家集等の中で見た時にどのように解釈できるか、を重視した。つまり各作品の原初的な表現意図を性格に把握するよう努めた。

その原初的表現意図を捉えることによって、その歌人固有の方法や表現意識を捉える事が可能になり、それを和歌史に接続する道が開けることが予想される。なぜなら、『百人一首』には和歌の教科書的な働きがあり、歌人たちの方法を育てた側面があるからである。

４．研究成果

本研究における『百人一首』の注釈的研究を基盤として得られた研究成果として、第一に『中世和歌史論 様式と方法』を上げることが出来る。そこでは、曾禰好忠・和泉式部・源経信・源俊頼・藤原清輔・西行・藤原俊成・藤原定家・源実朝ら『百人一首』の歌人の作家論的研究が収載されている。しかも、それぞれの歌人の『百人一首』歌を扱うこともある。あるいは『百人一首』歌そのものではなくても、『百人一首』歌に通じる様式意識や創作方法を分析している。曾禰好忠についてはその『百人一首』歌を中心に、景に寄り添って内側から把握する主体と景を外側から見る主体とが複合的に存するような固有の方法を剔出した。和泉式部については、その『百人一首』歌が、まるで男の立場に立ったかのように読めることを契機にして、自分を見る他者的視点に分裂している特異な様相を指摘した。源経信についても、その『百人一首』を重視した。歌中の「葦のまろ屋」が、点景であると同時に作者の居場所でもあるような二重の機能を持っていることを明らかにし、それが屏風歌の方法を継承するものであると指摘した。源俊頼については、主として『俊頼髄脳』を論じて、そこから『百人一首』歌ほかの彼の和歌作品の創作方法を考察するという、『百人一首』に関しては間接的な論である。ただし、そこで俊頼の様式意識の基底に「縁語的思考」を発見して定位したのは、和歌史を把握する視点の獲得という点で大きな意義をもった。歌の言葉は。相互

に網の目のように連想で繋がり、それが享受・創作・歌学・編集などのさまざまな和歌的行為の母胎となっている、と想定したのである。

藤原清輔に関してはその歌学書『奥義抄』の「古歌を盗む証歌」について論じた。清輔の本歌取り意識を中古と新古今時代をつなぐ過渡的なものと規定し，それが彼の創作方法にも繋がっていると見定めた。清輔の『百人一首』歌には直接には触れていないが、彼の本歌取りの方法に、縁語を生かすところがあることを私的している。これは本研究の成果と繋がる。西行に関しては、その縁語・掛詞をめぐる意識と、対話性との二面から考究した。とくに前者に関しては、本研究の成果である「縁語的思考」と深く関わっている。また西行に関しては、本書以外に「西行の恋の題詠歌」および「西行の恋の題詠歌・続」の成果を得た。これらは西行の恋の題詠歌を詳細に分析したものであるが、これは同じく恋の題詠歌とみなされる『百人一首』歌と問題性を共有するものである。藤原俊成の『百人一首』歌については、研究代表者にはすでに本研究以前に公刊している成果があるが、本研究では、それをさらに展開した。とくに「藤原俊成の縁語的思考」の論考では、「しのに」という、現代でも諸説ある難語をめぐって、正体がよくわからないことを利用して、その語句がもたらす連想を最大限に生かして創作する俊成の方法について論究した。また俊成の歌学書『古来風躰抄』については、テキストの中での個々の言葉の相関を発掘することで言葉の可能性を広げていく彼の意識について論じた。これも「縁語的思考」の展開の一面である。また、創作や歌学だけではなく、そうした「縁語的思考」が勅撰集編纂にも生かされていることを「千載集の羇旅歌」で指摘した。縁語的思考は、和歌の営為のさまざまな側面に発揮されているのである。

『百人一首』の撰者と目される藤原定家については、本書の核心の一つを形成している。中でも、「藤原定家の縁語的思考」は、定家の『百人一首』歌の構造と解釈そのものを取り上げた。当該歌の語句にまつわる連想を探っていくと、「しるしのけぶり」を媒介に、『源氏物語』の世界が引き寄せられていることを解明した。また、「藤原定家の方法」の論考は、著名な「春の夜の」の歌が、花の歌を詠むつもりで連想を広げ、最終的に花を表現上から消去したために、あれほど難解な歌となったと推定した。そして定家の歌にしばしば同様の、肝心なイメージを表現化しない方法が見られることを具体例を挙げて論証した。『百人一首』歌は、その典型であったわけである。源実朝については、その『百人一首』歌が、『万葉集』の歌句を裁ち入れていることなどにもあきらかなように、古歌の甚だしい模倣に至っている作品がある事に注目した。これは模倣や習作にとどまるものではなく、言葉の「音」を最大限に生かして連想を広げながら創作している実朝方法を示すものと把捉した。

以上のように、本書は、『百人一首』の歌に典型的中立ちで見いだされる「縁語的思考」が、いかに歌人たちに影響を与え、それが中世和歌史を形成していったかを解明している。その他、頓阿の題詠の方法に、連歌によって鍛えられた縁語的方法があることを指摘し、また、世阿弥にも和歌の「縁語的思考」をもとに能作品を生み出している側面があることを、能「高砂」を例に論述した。

その他の成果について述べる。「正徹の幽玄」は、正徹が鼓吹した幽玄のが意年賀、実は創作の方法に密接に結びついたものであること、そしてそれは「縁語的思考」に類するものであることを実証した。「万葉集と縁語」は、万葉集の長歌こそ「が縁語的思考」の淵源と見られることを、大伴家持の菟原乙女の長歌を例に考察した。「和歌史と『源氏物語』作中歌の相関」は、『源氏物語』須磨巻の和歌を取り上げ、それらが、『源氏物語』当時の和歌と相互に影響関係にあることを根拠に、第一義的な読者である女房たちと物語りを越えて直接結び合う側面があることを指摘し、『源氏物語』の和歌は作るような立場で読み味わうものだったという側面があり、その基盤が「縁語的思考」だったことを指摘した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 渡部泰明、正徹の幽玄、日本文学、査読有、通巻 778 号、2018、10－19
② 渡部泰明、西行の恋の題詠歌・続、説林、査読無、65 巻、2017、63－66
③ 渡部泰明、万葉集における「縁語」、上代文学、査読有、119 号、30－41
④ 渡部泰明、西行の恋の題詠歌、西行学、査読有、7 巻、2016、44－58
⑤ 渡部泰明、始まりの出会い――立原道造と和歌的世界――、孤帆、査読無、39 巻、2016、4－7
⑥ 渡部泰明、和歌をつくる、和歌文学研究、査読無、112 号、2016、16－20

〔学会発表〕（計５件）

① 渡部泰明、正徹の幽玄、日本文学協会第 72 回大会、2017
② 渡部泰明、万葉集と「縁語」、上代文学会大会、2016
③ 渡部泰明、和歌史と『源氏物語』作中歌の相関、日仏「源氏物語と和歌」シンポジウム、2016
④ 渡部泰明、和歌をつくる、和歌文学会大会、2015
⑤ 渡部泰明、西行の恋の題詠歌、西行学会大会、2015

〔図書〕（計５件）

① 高野晴代、渡部泰明　他、翰林書房、日本女子大学叢書 20 定家がもたらしたもの、2018、254（13－30）
② 渡部泰明、岩波書店、中世和歌史の研究様式と方法、2017、458
③ 三角洋一、渡部泰明　他、竹林舎、新時代への源氏学８　〈物語史〉形成の力学、2016、351（220－249）
④ 田渕句美子、渡部泰明　他、青簡舎、2014年パリ・シンポジウム　源氏物語とポエジー、2015、403（253－269）
⑤ 河野貴美子、渡部泰明　他、勉誠出版、日本「文」学史第一冊、2015、524（475－489）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
研究代表者
渡部　泰明（WATANABE,Yasuaki）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：60191813